
雑兵物語～敵を知り、己を知らば、百戦危うからずの段～

駿 慶三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑兵物語〜敵を知り、己を知らば、百戦危うからずの段〜

【Nコード】

N5546D

【作者名】

駿 慶二郎

【あらすじ】

とあるいくさ場。今日が初陣の庄衛門は、自信に溢れ、血気溢れる男だった。一方、おなじく初陣の小六は、小心者で戦を前に脅えてばかりで、庄衛門の怒りを買う。

(前書き)

原稿用紙換算6枚の短編です。

みなさまの忌憚の無いご意見ご感想をお待ちしております。

眼前に広がるのは、雲霞の如き人の原である。

林立する双方の旗が風にたなびき、地獄の剣山のような三間槍が、微かに揺らめいている。その空間を埋めるのは、人々の発する熱気である。初夏を過ぎたこの季節とはいえ、この暑さは尋常ではない。今は米粒程にしか見えないその一人々々が、己の野心を剥き出しにして、我等が陣営を食い破り、大将首を我が物にせんと、虎視眈々と伺っている。

かくいう庄衛門も、その一人である。戦の花とも言つべき最前列に身をやつし、今日が初陣と言う事を物語る、下ろしたての艶を帯びた胴丸に身を固め、自分の栄光を、己が手で勝ち取るうと言う英気と、これまで鍛え上げてきた己の肉体を頼りに、開戦の時を今や遅しと待ち望んでいる。

隣では同じく初陣の小六が、鉢金を締め直したり、槍を右左と持ち替えてみたり、頬をかいたり、せわしなく体を動かしている。真っ赤に充血した目は拳動不審に右往左往し、まるでべそを掻いているかのようだ。

小六とは同村で、幼い頃からの知り合いだが、いつも落ち着きが無く、自信も無い。臆病者の典型のような奴だ。同じ組の恥部といつても過言ではない。こういう奴が真っ先に命を落とすのだと、父上も言っておられた。別段小六が命を落とそうが、不具になるうが知ったことではないが、この男のせいで、他の組の者の嘲笑を買うことは腹に据えかねる。庄衛門は小六の首根っこを鷲掴みにすると、その脅えた顔を引き寄せた。

「この痴れ者が。儂が敵より先に、そつ首圧し折ってやろうか」

とたんに小六の動きは人形のように止まったが、今度は体全体が瘡のように震えだした。余りの不甲斐なさに、庄衛門の怒りは収まるどころか、高まる一方で、その手にさらに力をこめたが、小六の

震えは何をしようが収まらない。庄衛門は大きく鼻を鳴らすと、苛立たしげに、その手を離した。

その直後、腹に響く太鼓の音がけたたましく、重奏に鳴り響いた。開戦の合図である、押し太鼓である。

庄衛門は小六に対する怒りも忘れて、その華々しい未来へと続くであろう一步を、今まさに踏み出した。

後方で鳴り響く太鼓の音は、その激しさと速さを増し、否が応にも心を駆り立てる。具足が擦れ合う音と、人馬の足音が地を押し、地鳴りを巻き起こす。それは庄衛門の眼前でも同じだった。こちらの動きに呼応するかのように、敵軍が進軍を開始したのだ。

その距離は瞬く間に縮まり、相手の顔が認識できる頃になると、ほぼ同時に双方の槍が雪崩の様に降り掛かった。

三間槍は、槍とは言え、突き殺す武器ではない。その長大な長さを利用し、相手に上から叩き付けるのである。

庄衛門の膂力は並の男の三人分と言われている。その長さゆえに扱い辛い槍をまるで小枝のように揮い、相手の得物を二本三本と叩き落としてゆく。庄衛門は自分の働きに酔っていた。得物の次は、まさしく獲物、すなわち敵兵の脳天に、己の槍先を叩きつけるだけだった。

庄衛門が、無造作に相手との距離を詰めようと、歩を進めたその時、庄衛門の視界は光で一杯となった。次の瞬間、脳天に鈍い痛みが広がり、一度に全身の力が抜けた。

意識はぼんやりと有るものの、体のほうは痺れて、使い物になりそうに無かった。倒れた庄衛門の背には、敵味方の槍が襲い掛かり、体に次々と痛みが走った。

こんな筈ではなかった。

悔恨の念が頭をよぎる庄衛門の、やや薄暗くなった視界の先に、見覚えのある足ごしらえが映った。小心者らしく、念には念を入れて幾重も結び目を作った不細工な武者草鞋は、小心者らしい小六の

物に間違いは無かった。

小六は庄衛門とは違い、まだ大地に足を踏みしめていた。

自信に満ち溢れ、三人力と持て囃された庄衛門が地べたに這い蹲り、臆病者で、組の恥部とまで言われた小六がいまだ五体満足とは滑稽と言つより他はなかった。

薄れ行く意識の中で、庄衛門は戦に赴く前に、村の住職が言った言葉を思い出していた。

敵を知り、己を知らば、百戦危うからず -

所詮、己の自信等と言うものは、驕りに過ぎずなかったのだ。庄衛門は己を知らず、小六は臆病者という己を知っているからこそ、今もこうして、立っているのだらう。

庄衛門の意識は、己を嘲り笑ったところで、ことりと途切れたのだった。

(後書き)

最後までお付き合いいただきありがとうございます。御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546d/>

雑兵物語～敵を知り、己を知らば、百戦危うからずの段～

2010年10月10日07時39分発行